

冬枯やかゝる都の中にまで  
冬枯や便りなく鳴く旅がらす  
冬枯やますく高き松の聲  
冬枯て赤くもならず鶏の冠  
冬枯に成て手入れる垣根かな  
冬枯の寂や添ならん鶴の羽根  
冬枯や見上る空の色にまで

寒の入

江の底のよく見えすきて寒の入  
行く水の音にも寒の入る夜哉  
行燈も小ぐらき寒の入る夜哉  
見上たる空の色にも寒の入  
田の鶴や寒の入る日を鳴つる  
水桶のたがもゆるみて寒の入  
紅猪口の艶にも見えて寒の入

空高ふ見ゆる光りや寒の入

寒

川風の肌へ吹き抜く寒さかな  
一渡し後れて寒き河原かな  
登る日の色にも見える寒さかな  
人聲も聞えて寒き野中かな  
新らしき下駄の切れたる寒さ哉  
曙の晴を濱邊の寒さかな  
道づれに別れて寒き野中かな  
神の灯の色にも見ゆる寒さかな  
知り人に逢ふてまざる寒さかな  
幾度眼の覺めても寒き夜なりけり  
鐘の音に知らるる夜の寒さかな  
行燈も汚れたまゝの寒さかな  
寝返れば寝返る度の寒さかな

働いて居て忘れたる寒さかな  
寒き夜や舟から上る人の聲  
松原を獨り暮行く寒さかな  
水音の聞えて寒し小笹原  
乳貫ひの起し兼たる寒さ哉  
溜り氣でたまる仕事の寒さかな  
道連に別れてもとの寒さかな  
寝支度になつて火を焚く寒さかな  
船の灯の江面に寒き光りかな

凍

壁土の遣ひ残りや凍あがる  
磯の砂波のくる間を凍あがる  
野の道や人の踏間を凍あがる  
凍切て往來たえたる巷かな  
凍る夜や手に取るやうに山の鐘

行燈も凍るやふなる夜更哉  
小田の水流れの儘に凍りけり  
樹の雨の一雫づゝ凍りけり  
凍る夜や皆飛びさうな星ばかり  
鐘凍る夜更けを瘦る燈し哉

師走

雪勝ちに用のつかふる師走かな  
氣のつかぬ不二の白さも師走かな  
濟む用も初まる用も師走かな  
用に出て忘るる用も師走かな  
寝る隣り起る隣りも師走かな

大晦日、除夜

賣り買ひに狭きちまたや大三十日  
野を越ゆる提灯多し大晦日

孟蘭盆も昨日と過ぎて大三十日  
早く寝て年寄るまいぞ大三十日  
一とせの灯り芽出度し除夜の奥  
除夜の人まさかに早寝せざりけり  
山里や人の往來も大三十日

年の暮

摺る墨の曲りも年の暮らしき  
惜みく待たるゝ年の一夜かな  
風呂に入る迄にはしたり年の暮  
入相を聞きはづしけり年の暮  
讀めぬ名の手紙も來たり年の暮  
穩やかに年のくれ行く山家かな  
行逢ふた人やどちらも年の暮  
花活ける奥の静けし年のくれ  
寝た門をまたたきけり年の暮

年の尾や梅一輪を氣のゆるみ  
賑はしく年の暮れゆく街かな  
不二ばかり静かなりけり年のくれ  
色々に年の暮れけり人の上

行年

行年の姿は見えす都鳥  
行年や寝れば誰やら戸をたたく  
行年や笙の譜習ふ人は誰  
釜かけて行年おしむ一間かな  
行年を芽出度く老の軒かな  
行年の様を見渡す峠かな  
行年の雨に静けき街かな

□天象

冬の空

蒼々と冬の朝空静かなり  
雨となる雲も含みて冬の空  
水音のひゞきに澄むや冬の空  
冬となる空のつめたき光りかな  
高く見た上の高さや冬の空  
日の入つてしばらく赤し冬の空  
今日晴て今日の光りや冬の空

寒月、冬の月

寒月や心のしまる窓明り  
寒月や夜すがら風の少しつゝ  
寒月や凄うゆれたる江の光り

酒買に出て見上げけり冬の月  
晴れすぎて淋しき冬の月夜かな  
出際から光り冴へけり冬の月  
見上ぐれば見る程高し冬の月  
見る限り皆裸木よ冬の月  
戸の透をふと見出しけり冬の月  
人聲のとぎれて高し冬の月  
水に置く影さへゆれず冬の月  
澄み登る空の淋しや冬の月  
寒月や舟より高く見ゆる浪  
見る程の山みな高し冬の月  
冬の月山を離れて細りけり  
寒さうに舟漕ぐ冬の月夜かな  
戸をさしてまだ寝ぬ家や冬の月  
冬の月小さくなつて夜明けけり  
澄む空に澄むで出けり冬の月

見えて居る山迄遠し冬の月  
冬の月風を眞向に光りけり  
冬の月裸木ばかり照しけり  
流れ出た雲さへ高し冬の月  
見直して寒うなりけり冬の月  
瓦屋も藁屋も白し冬の月  
寒月や木曾はするどき山ばかり

時雨、初時雨、夕時雨

魚河岸に時雨て居たり上總舟  
雲よりは先に降りくる時雨かな  
初めての時雨程よく來たりけり  
鐘の音に添ふて降りくる時雨かな  
影見せし鳥さへ鳴かず初時雨  
傘かりて居る間を晴れる時雨かな  
降り止むて夕月白し初時雨

寝に戻る鳥せはしき時雨かな  
夜に入れば風も吹き添ふ時雨かな  
松の風竹の風聞く時雨かな

冬の雨

降り惜しむやうに降りけり冬の雨  
空高うなつて降りけり冬の雨  
降りつもの音る夜深し冬の雨  
こつそりと降つて行きけり冬の雨  
雲の根は切れて降りけり冬の雨  
降ると云ふ物々しさや冬の雨  
松ばかり濡れし色なり冬の雨  
晴さうになつて暮れけり冬の雨

霜、初霜、霜の聲、霜夜

裏屋根や霜の消えぬに暮つくる

つまる日を暮早めたる時雨かな  
雲脚は峰へとゞかず時雨降る  
草臥の足なでて聞く時雨かな  
時雨るゝや温泉山の煙り低う飛ぶ  
一と渡し越す間を二度の時雨哉  
道問ふて居る間に晴るゝ時雨かな  
峰に日はさして麓の時雨哉  
降りたらぬ夕空暗き時雨かな  
杉山にかゝれば暗き時雨かな  
一と町は晴れて一と町時雨けり  
降る音の耳を離れぬ時雨かな  
降りながら空の明るき時雨かな  
松風の音にはれたる時雨かな  
今濡れた窓へ日のさす時雨哉  
武藏野の其片隅や夕しぐれ  
思ひ出し思ひ出し降る時雨かな

霜に夜を移して明ける野面かな  
松ばかりいよ／＼青し霜の朝  
陽のさして霜の煙るや竹筏  
朝々や霜に浮立つ庭の土  
初霜と氣のつく庭の濡りかな  
初霜や斑にさめる紫蘇の紅  
押せば戸の走り過ぎけり霜の朝  
眼をとちて聞きまよめけり霜の聲  
踏むものに皆な音のあり霜の朝  
酔ざめの耳にも入るや霜の聲  
火を焚けば遠くなりけり霜の聲  
霜の聲心ろ鎮めて聞く夜かな  
風やんで松も聲なき霜夜かな  
もう誰か通りしあとよ霜柱  
初霜や皆ぬくさうな朝料理  
初霜や噂さする間に消え盡る

松風は絶えて星飛ぶ霜夜かな  
川音の常より高き霜夜かな

霰、寒

小さい木のうろの中まで霰あられかな  
門口へ拂ひし簀のあられ哉  
雨雲を分れて來たり霰雲  
戸ざはりの音に眼覺る霰かな  
鶏の音を降りをさへたる霰かな  
積るほど降らで晴れたる寒かな  
温泉煙りの中に音ある寒かな  
凄いほど駕へ降り込むぞれかな  
篋に音のせはしき寒かな  
晴れて行くあとこゝろよき寒かな  
吹き出した風に止みたるみぞれ哉

雪空をかしましう鳴く雀かな  
ぬくさうに着ふくれて居る雪見哉  
静けさの限りを晴れし雪の朝  
道連れに別れて越さす雪の山  
雪の庭松の影から日暮れけり  
降りたらぬ雪空黒う暮れにけり  
魚市の賑はふ雪のあしたかな  
降り積むで動かぬ雪の梢かな  
雪風に見上げる比良の高嶺かな  
ぬくくと煙り立けり雪の宿  
常盤木の早う暮けり雪の原  
女とは思ひもつかず雪の簀  
家見ゆる方へ飛びけり雪の鳥  
さし重る傘に音なし夜の雪  
暮たとも知らぬ明りや雪の原  
鐘ばかり暮るゝ様なる深雪かな

初雪

初雪や消ゆるまで見る植木鉢  
初雪や掃くほどなくて美しき  
初雪や松の下枝へ置きたらす  
初雪を景色に庵の夜明かな  
初雪や僅かに笹のたゆむ程  
初雪や隣りでも切る蕎麥の音  
初雪に見上る松の木振かな  
初雪やまだ鶏もふまぬ庭

雪

音もなく積りて居たり夜の雪  
隣りから道の付きけり雪の朝  
松島や雪のやんだる朝ぼらけ  
鐘ついて來る間に深し庭の雪

廣い野の向ふに雪の高嶺かな  
道問ひによれば呉れけり雪の枝  
束の間に降り積りけり暮の雪  
掃くまでは鶏さへ下りす雪の庭  
雪の山みな新しう並びけり  
咲き揃ふ木々も一夜や六つの花

吹雪

山駕にゆられながらの吹雪かな  
越え兼て見やる峠の吹雪かな  
市馬の戻りいぶせき吹雪かな  
降り暮るゝ音たくまじき吹雪哉  
止みさうになつて又來る吹雪かな

木枯

木枯やばらく砂の顔に來る

風や低う寝に行く夕がらす  
木枯を真帆に港の出舟かな  
木枯に向つて市の戻りかな  
木枯に灘越す舟の走りかな  
木枯のあとやかからりと西明り  
風にかかるゝ老の白髪かな  
木枯を麓に不二の高さかな  
木枯や江水も枯るゝやうに吹く  
木枯の吹いて明るし夜の湖  
風に吹き崩さるゝや山の雲  
木枯の中にするとし山の鐘  
木枯や吹き納まれば日の暮るゝ

□地文

氷、初氷

市馬の踏み破りたる氷かな  
花賣の籠して歸る氷かな  
更科や氷見るのも月ごゝろ  
眼にとまる塵とてはなし初氷  
脱ぎすてた簀から落る氷かな  
門川も流れず暮るゝ氷かな  
満干する汐間を岸の氷かな  
どれも皆な清き水らし初氷  
船腹に汐跡のこる氷かな  
ある水に事缺く今朝の氷かな  
松の葉をこぼれて氷る雫かな

照りつゞく日にも動かぬ氷かな  
水鳥の下り所なき氷かな  
廣い田も狭い田も皆な氷かな

氷柱

肥えたれば風に汚れる氷柱かな  
同じ夜に出来て揃はぬ氷柱かな  
紙燭する灯影さらつく氷柱哉  
日最中も伸るやうなる氷柱かな  
松の葉をかへて太る氷柱かな  
さしうつる旭影まばゆき氷柱哉

冬の川

冬の川筏の下を流れけり  
冬の川石をまたいで渡りけり  
一と筋の瀬でさへ淺し冬の川

吹く風に干付きさうなり冬の川  
細々と流れて長し冬の川  
倒れ木を橋に渡るや冬の川  
筏組む音も聞えて冬の川  
影うつる不二に眞白し冬の川

冬田

どこ迄も廣きながめの冬田かな  
嫁を見に横切つて行く冬田かな  
野戻りの道をつけたる冬田哉  
筑波根をかざりに廣き冬田哉  
まだ稻の匂ひも退かぬ冬田かな  
門口に見晴らし廣き冬田かな  
藁塚のあちこち高き冬田哉  
日溜りに水の見えたる冬田かな

冬の山

振向いて見れば雲あり冬の山  
道を聞く人さへ居らず冬の山  
不圖鳥に啼れて寂し冬の山  
真直ぐに立つた姿よ冬の山  
見えて居る寺迄遠し冬の山  
冬の山空に親しう聳えけり

眠る山

遠山の明るく見えて眠りけり  
暮るゝ日の入際赫し眠る山  
近よればよる程高し眠る山  
遠山の重なりあふて眠りけり  
あち向て眠る姿よ裸山  
降る迄にならぬ雲あり眠る山

眠りたる形のゆかし三笠山  
丹波路や何處を限りに眠る山  
降りさうな雲をかへて眠る山  
降りかけて日暮の早し眠る山  
野の寂を誘ふて高し眠る山  
霞むかと思ふ日もあり眠る山

枯野

火を焚いたあとの淋しき枯野かな  
爪突いた跡に風ある枯野かな  
人聲を力に越える枯野かな  
野は枯れて近う見えけり秩父山  
似た家も似た道もある枯野かな  
明ける日も入る日も赫き枯野かな  
黄昏に越し急かるゝ枯野哉  
脚元に暮るゝ日の照る枯野かな

□人事

袴着、髪置

袴着や御家柄なる神詣り  
袴着や今日だけでなき子の行儀  
はかま着や幼き所作のあらたまる  
袴着や不圖目につきし子の行儀  
髪置や扇遣ひの愛らしき  
髪置て猶美しうなる子かな  
髪置や見苦しからぬ子の立居

神送、神の留守

宵の間に仕度してこの神送  
神送りすまして拜む朝日かな  
たまさかの客も誘ふて神送り

日は松のもとから暮るゝ枯野哉  
行めば日の暮かゝる枯野かな  
家一つ小さく見ゆる枯野かな  
枯るゝ野やどちら向いてもむかひ風  
松ひと木ふと目につきし枯野かな  
野狐の走り過ぎたる枯野かな  
風道の真直につきし枯野かな  
旅人のたまゝ通る枯野哉  
先へ行く人見て急ぐ枯野かな  
枯るゝ野や何を見當に啼く鴉  
烏さへ風に追はるゝ枯野かな  
雲脚の高くはなれし枯野かな  
家一つあり見え枯野かな  
家のある方に道ある枯野かな  
馬よけて草の實拾ふ枯野かな

行先は海をかぎり神送り  
折目ある着物芽出度し神送り  
鈴音は常にかはらす神の留守  
嘶くは留守と思へず神の馬  
御留守にも曇らぬ神の鏡哉

神 迎

真直ぐに野風を受けて神迎  
裏迄も掃除届いて神迎  
惜げなく柳も切つて神迎  
御迎ひに引いて出けり神の馬  
耳たばの垢も拭ふて神迎  
森影の夜明賑はし神迎  
まだ鶏も啼ぬ中から神迎  
神迎ふ人にせかるゝ渡し哉

達磨忌や野寺の夜明賑はしき

十 夜

更る夜も音にはこもらず十夜鉦  
したゝかに出たり十夜の送り膳  
草臥の足も伸せず十夜堂  
どの連も女の多き十夜かな  
氣にかゝる白髪も出来て十夜かな

翁 忌

降る雨も心して見ん翁の日  
五六本筆もおろして翁の日  
惜ますに花も切らせつ翁の日  
翁忌や机の上の山家集

御命講(會式)

神 樂

一八八

すき腹をかゝへて見たる神樂哉  
笛の音に面白く見る神樂かな  
見てくるも次手ながらの神樂かな  
子心に成つて見にやる神樂かな  
町からも見にくる里の神樂かな  
一夜には惜しき仕度よ里神樂  
日のかぎり夜のかぎり見る神樂かな  
一年の無事を賑ふ神樂かな

達磨忌

達磨忌の馳走なりけり芋頭  
達磨忌や悟り顔して居る主  
達磨忌を朝から騒ぐ鳥かな  
達磨忌やくつろぎ顔の客主

島からも来てつとむるや御命講  
會式花蝶も来さうに作りけり  
夜すがらや會式太鼓の戸に響く  
いさましき振に會式の仕度かな  
御會式や野寺ながらも人の山  
雨晴れを勇む會式の太鼓かな

夷子講

内人で一座出来けり夷子講  
酒の出たあとの笑や夷子講  
泊る氣になつて酔ひけり夷子講  
下戸ひとり交りておかし夷子講  
にこやかな人揃ひけり夷子講  
手傳ひの先へ酔ひけり夷子講  
年々に人數殖えて夷子講  
膳立ての音も賑はしるびす講

一八九

大師講

珠數音もかしましからず大師講  
さし向ふ家やどちらも大師講  
鄙めさし座振も見えず大師講  
降る雪を障子一重や大師講

御取越

隣りでは蕎麥切る音や御取越  
ふいと眼にとまる小寺や御取越  
都合よく野仕事済むで御取越  
たまさかの掃除も出来て御取越

御佛名

草臥の膝さすりけり御佛名  
済むでから出る草臥や御佛名

心して水も汲みけり御佛名  
いつもより起心よし御佛名  
朝の間に來揃ふ客や御佛名

鉢叩

こつそりと來るや雨夜の鉢叩  
來る夜には幾人も來つ鉢叩  
宵過ぎや町を離れて鉢叩  
連れ立つて來て面白し鉢叩  
一人づゝ來て静かなり鉢叩  
夜嵐に追はるゝ聲や鉢叩  
夜の寂を誘ひ出しけり鉢叩  
見たやうで知らぬ人なり鉢叩  
宵ながら更けた聲なり鉢叩  
星ばかりきらめく夜なり鉢叩  
一人來て一人は遠し鉢叩

鉢たゝきばかりとなりし夜更かな

寒念佛

辻堂へ落合ふ聲や寒念佛  
明方の聲牙々し寒念佛  
渡し場に待せられけり寒念佛  
眼覺して聞けば間近し寒念佛

節季候

節季候の懇意顔して來りけり  
節季候のいそがしさうに來りけり  
さつくと節季候行くや市の中  
いそがしい日を節季候にせかれけり  
三人になつておかしや節季候  
親よりは子の面白し節季候  
京にては京の振りあり節季候

厄拂

尻聲を風にとられつ厄拂  
近くなる聲賑はしゝ厄拂  
駈込で厄拂はせる男かな  
吾が門を習ひ初めよ厄拂  
更けるほど聲やはらぎぬ厄拂  
よい聲のあつてをかしや厄拂  
隣りまで來ても間のあり厄拂

網代守

氣苦勞のありとはをかし網代守  
いつ見ても煙りの中よ網代守  
起て出る顔に念なし網代守  
月花と世を老果てゝ網代守  
火と酒でつなぐ命やあじろ守



一風情かはりし人よあじろ守  
酒樽をかゝへて更つあじろ守  
世の塵を拂ひ遂げてやあじろ守  
火に向て眠い聲なり網代守  
川上の雨見に立つや網代守  
網代木や暮ても波のむら明り  
傾くは水の力か網代杭  
落る日に立つ影寒し網代打  
京行をなつかしがるや網代守  
行逢ふて囁きあふや網代守  
人の居るやうにも見えす網代小屋

夜興引、紫漬

狼の道も覚えて夜興引  
供つれる人も交りて夜興引  
油断なき寝顔でありぬ夜興引

麥まきや世話しき中の樂もしき  
麥蒔てまかぬ畑の目立ちけり  
麥まきを濟せて欲しき小雨かな

煤掃(煤拂)

煤掃や神と佛を一と筵  
煤掃の中にも白し梅の鉢  
曠やかな仕度や廊の煤拂  
煤掃や帚とる子の愛らしき  
煤掃や猫は破風で晝寝哉  
笑はれて風呂を覗くや煤の顔  
さ筵に神と佛や煤拂ひ  
煤掃を遠く見て居る主かな  
掃く沙汰もかしましからす庵の煤  
煤掃いてひつそりとした日暮かな  
煤掃いて廣うなりたる家居哉

道もない山にも馴て夜興引  
紫漬や舟も静かに漕きよせる  
紫漬の工夫をこらす親子かな  
紫漬や手心なれし水加減  
紫漬や見人も嬉しき程とれる

岡見

生産神へまはりて來たる岡見かな  
來て見れば連のありたる岡見かな  
簀ばかり風に音ある岡見かな  
年毎に支度もなれて岡見かな  
風呂焚て岡見の戻り待ちにけり  
そつと出てそつと戻りし岡見かな

麥蒔

麥蒔に願ひあてたる日和かな

垣越に不二の白さや煤拂ひ  
煤掃や庭に淋しき古行燈

餅搗

餅搗に其夜はせまき座敷かな  
餅搗や湯氣の中から夜の明る  
隣りのときそうしておかし餅の音  
曙や遠く聞ゆる餅の音  
登る日や餅搗く湯氣の香に曇る  
軒並やたゞ賑はしき餅の音  
更けるとも思へぬ夜なり餅の音  
餅つきも人手任せの庵かな  
手作りの米で餅つく在所かな  
餅つきや水を汲む手に月のさす

餅蒔

豊かなる年の青みや餅蒔

松影もさして目出度し餅苳  
曙や見勝る色の餅苳  
奥の間へ敷き廣げけり餅苳  
新しき菓の香嬉し餅むしろ  
置きかへる鶯籠や餅むしろ  
さし登る旭に匂ひけり餅苳

年忘

山里や分相應に年忘  
騒がしい話しも海士の年忘  
歸る氣で泊りになりぬ年忘

年の市

提灯の用意おかしや年の市  
賣り買ひも流石都よ年の市  
賣りに來て買ふ物もあり年の市

寝ぬくみのしばらく抜けぬ布團かな  
出來きらぬ中に寝て見るふとんかな  
客の手を押へて疊むふとん哉  
乗出して雨の音聞くふとん哉  
眼の覺めた方へ引かるゝ布團かな  
寢返れば夜風吹き抜くふとん哉  
掛けかへしてしばらく寒さふとん哉

頭巾

頭巾着た姿も親に似たりけり  
川越しをするとてかぶる頭巾かな  
振向けは先も振向く頭巾かな  
火の側へよつてもぬがぬ頭巾かな  
尺八の塵打拂ふ頭巾かな  
湯貫ひの忘れて戻る頭巾かな  
隣りまで來て雨に逢ふ頭巾かな

頼まれた物買ひ足すや年の市  
買物を買ひ忘れけり年の市  
戻り荷を尋ぬる馬士や年の市  
馬引いて迎ひの來たり年の市

衾(紙衾)

見くらべて古きを笑ふふすま哉  
更るほど音やはらかし紙衾  
客人に望まれて出すふすま哉  
夜ぬくみのまだある晝や紙衾  
來た人を待せてたゝむ衾かな  
着心に翌日の雨知る衾哉  
寢たふりの我とおかしき衾かな  
客の間や皆新らしき紙衾

布團

惜氣なく掛けてくれたるふとん哉

方丈の居間へ來て取る頭巾かな  
出仕度になつて尋ぬる頭巾哉  
搦揆もおへぬうちから頭巾哉

紙衣

見たよりは着心のよき紙衣哉  
朝戸出を犬の吠えたる紙衣かな  
市に出て獨り目につく紙衣かな  
肌馴ぬうちの冷たき紙衣哉  
五六日着て着心の紙衣哉  
着る時を嫁の手傳ふ紙衣哉  
たゝむ手にぬくみの移る紙衣哉  
雨の日を音の和らぐ紙衣哉  
年寄の着て相應しき紙衣哉

足袋

白足袋のそろつて潜る鳥居かな  
玄關へ来て拂ひけり足袋の塵  
朝寒やよごれの見えし足袋の裏  
花嫁に當て、貫ふや足袋の繼

炬燵

大勢になつたら寒き炬燵かな  
草臥た脚には狭き炬燵かな  
眼の覺る時を冷へたる炬燵かな  
居直れば日の暮れかゝる炬燵かな  
悦びの出來て離るゝ炬燵哉  
後ろ手に窓の戸たてる炬燵哉  
のり出して雨の音さく炬燵哉  
鶯へ火を入れに出る炬燵哉  
居かはつた隅から寒き炬燵かな  
一隅は老にまかせた炬燵哉

置かへて碁盤をすへる火鉢哉  
さし向に咄しの盡きの火鉢かな  
出かゝつてまた手をかざす火鉢哉  
降る雪を見に引よせる火鉢かな  
勝手から眼に付く奥の火鉢哉  
挨拶もせぬ中に出す火鉢哉  
花活けた濡手の匂ふ火鉢かな  
物書いた手を休ませる火鉢哉  
火鉢にも寄り草臥し座敷かな  
濡て來た猫の摺りつく火鉢哉  
只一人火鉢に雨を聞く夜かな

埋火

寝支度になつて埋火したりけり  
埋火に向いて納めつ筆の鞘  
更ける夜や埋火消えて猶淋し

寝る暇を貫ふて這入る炬燵かな  
笑ふたる人も寝込みしこたつかな  
日の暮れて居たとも知らぬ炬燵かな  
不二を見て醒す炬燵の逆上かな  
遠慮なき人ばかりなる炬燵かな  
頭陀あけて花の反古見るこたつ哉

湯婆

更ける夜につれて冷えたる湯婆哉  
寝心に夢も結ばぬ湯婆かな  
晝しばし枕にかゆる湯婆かな  
東雲にぬくみの餘る湯婆かな  
先へ寝る人に借らるゝ湯婆哉

火鉢

料理して來た手の匂ふ火鉢かな

埋火をかゝへて聞きぬ雨の音  
埋火や消えてもしばし火のぬくみ  
埋火をたよりに庵の留守居哉  
埋火の中から立つや夜の風  
埋火に針の疲れ手休めけり

爐開

爐びらきや雀も軒に來て覗く  
ろびらきやよく野仕事の片付きて  
爛開きに猫も圓居の仲間かな  
爐開きや老も朝から庭掃除  
爐開きや鳥の籠まで新しき  
爐びらきや世柄もよくて賑はしき

冬構

上總戸や障子一重を冬がまへ

竹垣も今日結びあげて冬がまへ  
軒先や積た薪も冬がまへ  
隣りからせかれて冬の構哉  
山を根にして手軽さや冬がまへ

冬籠

樂しさや鳥を相手の冬籠  
墨筆の用意もありて冬籠  
机にもよらで暮れけり冬籠  
鶴下る田を手近くに冬籠  
舞ふ田鶴の影見に立つや冬籠  
布摺りの柱美しくし冬籠  
鶯の餌もたくはへて冬籠  
一ごもり今日ももたる、柱哉  
冬間には梅も咲かせて冬籠  
不二見ゆる窓はふさかす冬籠

槽の火に寛ぐ客と主人かな  
槽焚てひそかに雨を知る夜かな  
鶏も寝かねる程や槽明り  
更けて行く夜に焚きふやす槽火かな  
槽を割る手にあたりけり山の月  
槽入れて見直す雨の夜空かな  
槽の火に向いて眠たうなりにけり

炭、炭籠

起り炭深山めきたる匂ひ哉  
たくましき音して削る粉炭かな  
炭籠の煙には染まぬ白髪かな  
炭籠の煙り立越す外山かな  
炭はねてしばし崩るゝまどの哉  
炭籠やどちへ向ても小野の里  
香に立つは花咲た木か起り炭

古曆

月花も巻きおさめけり古曆  
巻いた手にのこる埃や古曆  
見る暇もなく古びし曆かな  
趣もなく古びたる曆哉  
昨日より今日見て古き曆かな

槽

天氣見に出て拂ひけり槽埃  
居所をきめてをかき槽火哉  
くべたしの夜に燃え残る槽火哉  
槽の火や居かはる方へ向く煙  
槽の客風呂まで焚て戻りけり  
燃えぶりに晴るゝ夜を知る槽かな  
手心に埃りも立てぬ槽火哉

立ち消えのしていちらしき粉炭哉  
かざす手に色うつりけり起り炭  
深山木の薫り立ちけり起り炭  
炭くたく音にもこもる夜更哉  
炭ついで又ひきよせる硯哉

年木(年木樵)

雪空を見かけて出たり年木樵  
軒端より高ふ積むたる年木哉  
思ふ程積むで嬉しき年木哉  
隣りにもまけぬ年木の用意哉

櫓

櫓や初めてはいて草臥るゝ  
櫓や見たとはかはるはきごゝろ  
櫓や力自慢の道案内

櫓や馬引き入れし臺所  
かんじきをはいて都の咄し哉  
かんじきを借りて越えたる山路かな  
櫓の雪落しけり風呂の前  
櫓を履いて見上げる峠哉

雪車

雪車唄や夜のうちからいさましき  
家近うなりて勇まし雪車の唄  
唄聞いて犬も出でけり雪車迎ひ  
雪車唄の近しと風呂を焚せけり  
雪車唄や日は西山へ入てまで  
雪車引にさし覗かれぬ湯殿口

口切

口切や何となく氣の風雅めく

口切の日は嬉しげな雀哉  
口切の日は暮やすき一坐哉  
口切の茶の香や高き袖袂  
口切の日に出来あがる壘哉  
口切や障子にうつる陽のぬくみ  
口切に嬉しき老の起居かな

臘八(温槽粥)

温槽や一箸づゝにかはる味  
温槽を念佛となへて醒しけり  
温槽や坐取も丸き内人數  
温槽や謂れも深き鍋の底  
臘八や里賑はしき朝煙り  
臘八や心祝ひの豆腐汁  
臘八や快よう就く朝の膳  
臘八に願ひ當てたる天氣哉

臘八や月代出来し寺男  
臘八や入りこゝろよき朝の風呂

風呂吹

風呂吹に寝ごゝろのよき夜なりけり  
風呂ふきや不圖來合はせて客になる  
風呂吹や上戸と下戸の別もなき  
風呂吹に力らの入りし咄しかな  
雪風に風呂吹の夜となりにけり

納豆

旅僧の珍らしかるや納豆汁  
旅僧の寝たを起して納豆汁  
野の寺や客を見掛けて納豆汁  
納豆や色に出る間のもどかしき  
親しさに膳も隔てず納豆汁

納豆や日馴るゝ程に色のよき  
納豆の仕込み忙しき野寺哉

薬喰

知人に呼び戻されて薬喰  
隔てなき鍋に嬉しや薬喰  
よい友の不圖落合つて薬喰  
人がらや薬喰ふのも氣遣ふて

動物

鷹

鷹なくや風となりたる雨の雲  
居え鷹の立たんともせず朝嵐  
今鷹のそれしあど吹く嵐かな

それ鷹の風より強き羽音哉  
のしあがる鷹の下吹く嵐哉  
鷹狩や馬引く道も狭さうに  
野心をまづ見る鷹の眼ざし哉  
鷹の眼に影引く松の嵐哉

千鳥

行燈をかき立て、聞く千鳥哉  
目覚ても目覚ても聞く千鳥かな  
晴れさつて千鳥の夜とはなりにけり  
汐風に聲されざれの千鳥哉  
曙に聲のしづまる千鳥哉  
戸にあたる風氣遣はし千鳥の夜  
たゞ一羽ないて淋しや晝千鳥  
有明ける聲の静けき千鳥かな  
一羽啼き二羽啼きふえて小夜千鳥

風風て遠音侘しき千鳥かな  
島の灯のとろく細し小夜千鳥  
啼く度に夜の更けて行く千鳥哉  
風やんで近うなりけり啼く千鳥  
鳴きつれて夜を深めたる千鳥哉  
月の出る方へ鳴き行く千鳥哉  
貝屋根の白う見ゆるや千鳥の夜  
聲遠し近し風吹く夜の千鳥  
浪をよけ浪をよけ鳴く千鳥哉

水鳥、浮寝鳥

水鳥や一つ動けば皆うごく  
水鳥の仲よう並ぶ夜明かな  
水鳥の皆な旭に向て浮みけり  
水鳥の中からも立つ嵐かな  
水鳥や瀬に向く時の羽づくろひ

高う出た月のするどし啼く千鳥  
島の灯は月にくらみて啼く千鳥  
更くるほど夜を餘所にして千鳥かな  
酒の座のひければ近き千鳥哉  
明近き寝覺心や啼く千鳥  
浦の夜は千鳥ばかりとなりけり  
村雨のはれて月夜や鳴く千鳥  
朝風やなかぬ千鳥の低う飛ぶ  
登る旭に皆向いて立つ千鳥哉  
聲近うなつて夜更ける千鳥哉  
冷る膝抱えて聞くや小夜千鳥  
闇の夜も啼くだけは啼く千鳥かな  
千鳥なく夜や飛そうな星ばかり  
出て見れば近くもあらず啼く千鳥  
一羽二羽朝の川越す千鳥哉  
空に引く波の光りや啼く千鳥

風音を餘所に静けし浮寝鳥  
脊に山の夕日受けり浮寝鳥  
水鳥の聲より高き羽音哉  
水鳥の昔聞へ戻る日暮哉  
水鳥の睦みをも吹く嵐哉  
水鳥の舟やり越して浮みけり  
水鳥の搔き濁しけり朝の川

鴨

變る瀬の中に睦みし小鴨哉  
吹きよせた様にあつまる小鴨哉  
うつかりと出れば鴨立つ門田哉  
山へ日の入り際赤し鴨の聲  
鳴なくや雨の降る夜も水明り  
夜嵐や淋しき聲の離れ鴨  
月の出に向いた聲あり小田の鴨

朝風や門田へ下りし鴨の聲  
鴨なくや闇にも見ゆる湖の上  
曇りたるまゝ日も暮れて鴨の聲  
鴨なくや晴れて月澄む湖の上

雲

雨風のさはりも見えず番い鴛鴦  
鴛鴦の川水も一と瀬に流れけり  
鴛鴦の人にありたき陸みかな  
登る日に鴛鴦向て流れけり  
一と筋の流れに鴛鴦の番ひ哉  
鴛鴦や飛直しても一と番ひ

鷓鴣

居ると見し中に去りけり鷓鴣  
蛛の巢を被りて出たり鷓鴣

古井戸の中から出たり鷓鴣  
白挽の音にもなれて鷓鴣  
日毎来てゐながらさとし鷓鴣  
眼の前に居たとは知らずみそさとい  
今明けた木戸から来たり鷓鴣  
日和にも高ふは飛ばす鷓鴣  
啼くまでは居たとも知らず鷓鴣  
待て居た日には来もせず鷓鴣  
咳拂ひして見なくしぬ鷓鴣  
閉めてある木戸から来たり鷓鴣

木兔

木兔なくや晝さへくらき森の中  
日は木兔の聲から暮るゝ山家かな  
山風のやむ間を淋し木兔の聲  
木兔なくや賤か一つ火ほのぐらき

更るほど雨もつのもりて木兔の聲  
木兔なくや暮ては馬も引かぬ道  
常盤木に暗き峠や木兔の聲  
木兔なくやまだ風の吹く月の色

冬の雁

冬の雁聞くや藻屑を焚きながら  
雪空を低う通ふや冬の雁  
聲ひえて夜の晴れ知るや冬の雁  
雁なくや冬の夜すから雨の中  
夜嵐に離れし聲や冬の雁

暖鳥

曇る夜の猶長からん暖鳥  
放たれて又里へ来つ暖鳥  
明け渡る空へ飛びけり暖鳥

曙に向いて逃げゝりぬくめ鳥  
飛ぶ先はどことも知れずぬくめ鳥  
更けて啼く聲のあはれや暖鳥  
恙なく朝日受るやぬくめ鳥  
妻鳥の夢も破れんぬくめ鳥  
終夜啼かず動かず暖鳥

寒苦鳥

日に向いて鳴もあはれよ寒苦鳥  
啼き遂げぬ聲の淋しや寒苦鳥  
我事に思ひかへても寒苦鳥  
風音の向ふ羽や寒苦鳥  
鳴く度に夜の更け行くや寒苦鳥  
雨に猶淋しさましぬ寒苦鳥  
二里暮れて来て聞得たり寒苦鳥  
本意なくも日は暮れにけり寒苦鳥

笹啼

笹啼や霞みさうなる朝日和  
樂しさを笹鳴く藪を垣一重  
笹啼や山ともつかぬ小篠原  
さゝ啼や山根に當る日の匂ふ  
日毎ゐてさゝ啼初る日和かな

冬の蠅

たまさかに居て目立けり冬の蠅  
日に向て動き出しけり冬の蠅  
日溜りへ捨てやりけり冬の蠅  
爐の灰に汚れて白し冬の蠅  
隣りへも通はすなりぬ冬の蠅  
火を焚けば動き出しけり冬の蠅

爐に向いてくつろぐ膝や冬の蠅

鯨(鯨突)

鯨浮く沙汰に賑はし朝の濱  
浪よりも高う汐吹く鯨かな  
浪影に聲いさぎよし鯨突  
吹く汐に舟も傾く鯨哉  
沖荒れも今日鎮まつて浮く鯨  
面白や鯨一つに人の山  
ひく舟の少さく見ゆる鯨かな  
日は西になつてふと浮く鯨かな  
鳥人も出て手傳ふや鯨突  
浪越しに矢先くるはず鯨突

鯨、河豚

鯨汁に朝寢案して起しけり

列のけて犬にもやらす鮫の腸  
傾けた徳利の多し河豚仲間  
箸取つて氣遅れしたり河豚と汁

生海鼠

いろくにかはる生海鼠の動き哉  
汐のさす時をうごめくなまこ哉  
方圓の器になじむ生海鼠かな  
見て居ればおかしう動くなまこ哉  
つくくくと猫の見て居る生海鼠哉

□ 植物

山茶花

山茶花や定まり切つてよい日和

茶の花

山茶花の向ふに白し不二の山  
山茶花に残りて白し朝の月  
山茶花の暮る影さす障子哉  
山茶花や咲きも揃はで散り初る  
山茶花の影に明るき障子哉  
山茶花の咲かゝりつゝ立つ日かな  
山茶花や見居てるうちに暮れかゝる

月白う置て夜明つ花茶の木  
茶の花やどこを限りの一と畠  
垣内や摘まぬ茶の木の高う咲く  
狭山路や茶の花見えて家見えて  
野の寺や茶の花低き這入口  
茶の花や眼の行く先は京の町  
道筋やどこ迄宇治の花茶の木



一筋に茶の花匂ふ日和哉  
畑の茶や小さい木に似ぬ花の數

枇杷の花

をつくうに咲て居るなり枇杷の花  
葉に露をさへへて咲や枇杷の花  
枇杷の花咲ほこらぬを風情哉  
咲くふりの冬に似合はし枇杷の花  
日最中の影さへうすし枇杷の花  
人知らぬ香りありけり枇杷の花

冬椿

冬だけに花の小さき椿哉  
蟹か家に折り荒されて冬椿  
咲榮えの冬とも見へぬ椿かな  
裏山や雑木の中の冬椿

結構な日和となりぬ冬椿  
咲く迄になつて氣強し冬椿

寒梅、室の梅

しとやかに咲いて居るなり室の梅  
世の風を餘所に開くや室の梅  
室の梅日毎咲くかと覗きけり  
客人のあつて出しけり室の梅  
鳥の來て遊ぶ日向や冬の梅  
伸る陽につれて咲けり室の梅  
柴の戸も一と趣や冬の梅  
室の梅望み通りに開きけり  
寒梅の匂ひこぼすや風の隙  
寒梅の朝日のとゞく藪表  
寒梅の咲きかゝりつゝ立つ日かな

冬牡丹

鉢よりも大ききう咲くや冬牡丹  
咲きかける日が吉日よ冬牡丹  
案内で通る一間や冬牡丹  
次の間にたてる茶の香や冬牡丹  
床の間に据へて見せけり冬牡丹  
世話もよく届いて咲くや冬牡丹  
ぬく／＼とした咲きぶりや冬牡丹  
冬牡丹咲いてよい日のつゞきけり  
身に暇のあつて咲かせつ冬牡丹

寒菊

寒菊やつゞまやかなる花配り  
寒菊や鉢へ移せば振のつく  
茶道具に狭き一間や冬の菊

寒菊やふと心付く茶のぬるみ

水仙

垣へ日のはや傾きぬ水仙花  
水仙や垣の外へも香の洩るゝ  
水仙の寒み離れて開きけり  
不圖梅の香りも添えて水仙花  
水仙や清きを好む花づくり  
霜白う置いて夜明つ水仙花  
水仙や汚れぬ色に咲通す  
水仙の葉裏に薄き日ざし哉  
水仙や花にさはらぬ葉の亂れ  
水仙や野の寂隔つ垣の内  
水仙や雪の中にも白う咲く  
水仙の花に静かな日脚哉  
水仙の花や惜くも日の暮れる

水仙や寒い朝から花の咲く

石露(大莖の花)

石露や風なき晝を鶏の寝る  
邪間にした石も風情や大莖の花  
和らかな日の當りけり大莖の花  
雨凌ぐ葉もけなげなり大莖の花  
垣結はぬ野鍛冶の庭や大莖の花  
袖垣のこはれし儘や大莖の花  
振りかはる日影もうすし大莖の花  
暮る日のさして淋しや大莖の花  
風音もとぎれた晝や大莖の花

枯尾花

快よい日和に枯るる尾花哉  
枯れてまで風たちやすき尾花哉

門先や湖を棹りに枯尾花  
枯れたれば野塚目に立つ尾花哉  
友枯れに流れも細る尾花かな  
武葉野の名になつかしや枯尾花  
枯伏して野面の廣き尾花かな  
月影に根元のくらし枯尾花  
枯れふして松なほ高き尾花哉  
夕月や枯た尾花の果に澄む  
山間や枯れた尾花のむら戦き  
夜な夜なの風も細りて枯尾花  
枯るゝだけ枯れて戦かぬ尾花哉  
枯れ初て雨のするどき尾花かな

枯柳

枯れてまでやさしう見ゆる柳かな  
枯れるほど物に寂引く柳哉

枯れ切つて風も音なき柳哉  
舟よせる程の水なし枯柳  
夕影の江に浮きすむや枯やなぎ  
枯柳やどこ迄利根の長堤  
門口の淋しうなりぬ枯柳  
水際を離れて枯れる柳哉

枯蘆

枯芦や渡しし守呼ぶ川の端  
芦かれて島の寂ひく入江かな  
片葉には青みもあつて芦枯れぬ  
枯芦に成つて手強し風の音  
青い葉も折々芦の枯間かな

落葉

二階から掃き出す峰の落葉かな

落ついて居ても風もつ落葉かな  
搔きためし落葉から立つ嵐かな  
落葉して鳥の目につく梢かな  
落葉して登る日のさす机かな  
鶏の玉子かき出す落葉かな  
一本の木にこれほどの落葉かな  
吹きかへる風に纏る落葉哉  
落葉搔く中に尊き祠哉  
雲切れの見える空より落葉かな  
落葉して明るう歩行む山道哉  
水底にありく見る落葉かな  
瀧壺へ吹込む峰の落葉哉  
吹通す風の明るき落葉哉  
落る葉は落て梢の静かなり  
落葉ふむ音も尊とし神の庭  
谷川の埋もりさうな落葉哉

雨になる日の落付きを落葉かな  
ちら／＼と日に照る風の落葉哉  
留守にして二日振りなく落葉哉  
落葉して見あげる木々の高さ哉

木の葉

餘所を吹く風にも散りし木の葉哉  
落つけばまた風に飛ぶ木の葉哉  
はらくと障子に風の木の葉哉  
鐘の音の響にも散る木の葉かな  
山道や駕の中へも降る木の葉  
焚いて迄風立ちやすき木の葉かな  
しばらくは地に落付かぬ木の葉かな  
降る雨の音に鎮る木の葉哉

冬木立

香にはほこる程には咲かず歸り花

冬菜

雪所々に青き冬菜かな  
摘屑も出さぬ程つむ冬菜かな  
後ろから風の冷たし冬菜畑  
賣る程もなくして事足る冬菜かな  
莖立つて春へ近よる冬菜かな

干菜(掛菜)

干る音の夜々に變りし掛菜かな  
夜になつて音のやはらぐ干菜かな  
表裏なく乾きたる干菜かな  
雨になる音も聞ゆる干菜かな

大根

暮やすき日に影長し冬木立  
山徑やどこを限りの冬木立  
枯る木は枯れての上や冬木立  
いろ／＼の木も一振りに冬木立  
見え透きて筑波は黒し冬木立  
風なくて静かな日あり冬木立  
日は西になつて明るし冬木立  
立ちよればよい日さしけり冬木立

歸花

噂さより花の小さし歸り花  
枝々に少しづつあり歸り花  
黄昏の鐘に淋しやかへり花  
影薄う置いて日暮つ歸り花  
日に向いて薫り立ちけり歸り花  
日の影のまはれば寒し歸り花

夕映えの消える迄引く大根かな  
兄の來て引きぬかれたる大根かな  
智殿も出で、引ぬく大根哉  
干場所を拵らへて引く大根かな  
根ごたへを試みて引く大根哉  
引抜て見れば大きな大根かな  
手加減の知れ、ば暮つ大根引  
束ねても熨斗のかゝらぬ大根かな  
雪空に戻りは寒し大根引  
一本づゝ聲かけて引く大根かな  
大根ひく手にさはりけり不二蔵  
まだ明けぬ夜から引抜く大根かな  
引てさへ育つやうなる大根かな

附

編

俳諧梨の花終

---

紀行吟及其他

□ 東京紀行の途上

病後未だ歩まざるに要事のありて  
東京に至らんと俾を備ふて先づ秋  
川を渡る

我顔のやつれうつるや秋の川  
秋川や眞正面から秋の風

山田夕峰にかゝりて

俾から手を出して折る尾花哉

川口村松見世に憩ふて

見世出しの下に吹かれつ秋の蝶  
馬子たちの元氣つきけり今年酒

八王子停車場にて元八王子城の舊  
蹟を望む

城山や追手搦手秋の色  
城山や風を旗手に秋寒き

汽車多摩川を渡る

玉川や稻にも清き波のたつ

立川停車場にて

みな不二へ向いて並ぶや秋の山  
山遠くなるやいづこも野の錦

大久保を過る

西東見るもの多し園の秋

飯田町にて汽車を降る

十月を寂し都の柳かな

元住みし町の戀しや秋の暮

明倫社にて少しばかりの事をとが  
められければ

あやまちは心の外や年の暮

□ 關西紀行の途上

明治三十三年一月大阪府検査醫員を命ぜら  
れ、同地に至りし途上及び彼地に滞在申折  
にふれて詠めるもの

腕車を驅て新橋驛に至り待つこと  
暫時

車夫に酒代増したる霜夜かな

乗客多く流石に廣き構内も須臾に  
して満たさる

寒月や流石都は人多き

東天の一角曉色を帯び品川灣頭鏡  
の如く一點の塵を留めず

冬も尙長閑や風し袖が浦  
世の冬をかくして廣し袖が浦  
舟人や寒さにめげぬ櫓扱

大磯附近は梅花既に盛りなり

まだ餘所のない香のゆかし梅の花  
寒梅の咲きけり風の吹く中に

國府津附近にて富士山を眺め

いつ見てもうれしきものよ不二の山  
鶴も舞ひ添はんばかりや不二の山  
神代から盡ぬ雪かな不二の山  
鶏の聲澄み渡る日や不二の山  
雲でさへとゞき兼たり不二の山

山北より以西山又山谷又谷を廻り  
酒匂川を渡る

谷川や氷の上をはる氷

御殿場は頼朝公が巻狩の時本陣の

所にして富士を見るに屈強なり

不二の山麓も空のにしき哉  
日の表月の表や富士の山  
青空の益々青し不盡の山

汽車は四へ四へと進む、土朗が「今日も見え今日も見えけり不二の山」と詠せしは此邊りなるらんと慕はしく

山の上雲の上なり富士の山  
遠山の雲もけしきや田子の浦

富士川を渡るに治承の昔想ひ出さる、水禽の群なけれ共水の流は滔々として今も昔とかはらさるべし

富士川や海へ落込む水の音  
水鳥の一二羽淋し水の上

静岡停車場にて茶を喫し、心氣の疲れを慰む内に汽車早くも進行をはじめ

冬枯を見越して青し松ばやし

水涸れてさへ此水や大井川

大井川を渡りて  
小夜の中山にて祖翁が高吟を忍び且つ此邊にて名物餡の餅を賣ると聞けとも其味も試みされば

冬の風骨にもしみる思ひかな

掛川驛にて平将門等十九首を此地に埋めしと云ふ話を思ひ

霜枯れし草や彌陀佛阿彌陀佛

袋井中泉を過ぎ磐田原にあたりを望みて

冬ざれや駿遠三の山もまた

天龍川を渡りに北風凜烈車窓を掠む

風寒し天龍川の瀬につれて

三方ヶ原は古來萩の名所なり

枯萩に引馬の昔し偲びけり

三方ヶ原は往時武田徳川兩軍の激戦地たり

木枯の吹き鎮まりぬ犀が崖

濱名湖にかゝりし時其風光に心を傾く

松を越え船をこし鳴く千鳥かな  
松の色くつきり青し冬の風

木曾川にて

木曾川や晝も千鳥の啼集ふ

長良川を過ぎんとする時夕陽山に没して暮色山河を罩む

何一とつ見とめず冬の長良川

琵琶湖畔にかゝりて

鳥羽玉の夜も水白し琵琶の湖

蓬坂山にかゝりし時

霜枯や皆向々の草の先

逢坂に關の戸もなき霜夜かな

山崎古戰場を過りて進む、夜益々暗く風いよゝ寒し

笹原や昔しを忍ぶ霜の聲

一月二十一日木津川筋に杖をひく、寒中なるに雲雀類に啼く

木津川の船はまだ出す啼雲雀

同日小林海岸にて珍らしくも鶯を聞きて

鶯やもう水仕にもよい日和

炭谷堤にて六甲山脈を望み

走る帆の間あいだや雪の山

千島の東南に當り白雲の上に金剛山を望む

鹿岩にひとし麓の冬木立

百八重冬鹿砦の木立かな

天王寺に遊びて

冬の日や軒より低くさしめぐる  
高欄や雲間洩る日の寒うさす

同寺なる五重塔に登りて

寒き世を詠めて寒き心かな

天満天神にて

町人の心も匂へ梅の花

天満市場にて

河岸揚の大根白き夜明かな

松島遊廓を過る時

町中や櫻一と並冬木立

大坂城を見て

松の榮今にして見る寒さ哉

道頓堀にて

一月や皆嬉し氣な人通り

桃山御殿の齋蹟を訪れて

桃山の桃や畠の隅に咲く

安治川にて

安治川の渡船隙なし春の風

一月廿八日千歳なる農家に到るに

舊正月を祝ふため此所彼所にて餅

搗きたり、其餅粒々として妙なる

ものあり聞けば粉末に少許の糰米

を和して搗くなり

丹精のこもりし味や糰餅

大坂灣頭淡路島を望む

霞む日や眼鏡のさかぬ淡路島

節分の日男子は種々の桂を冠り、

女子は古代様の髪を結び歳神に詣

づ、其様殊に面白し

節分や髪品目立つ町つゞき

灘波堀江の阿彌陀池にて

池水やぬるみても澄む物の影  
今も尙彌陀の影あり春の水

四ッ橋にて

橋渡り渡り見上る柳かな

木津の勘助渡にて

春雨や迂りさうなる渡し船

大坂桑港

仕事師の皆な出揃ふや春の風

二月十一日勤務の閑を得て汽車に

て西遊す、布引瀑布にて

朝夕や春まだ寒き瀧の音

一の谷にて

春遅し遅しいかさま古戰場

須磨の浦にて

波幾重霞幾重ぞ須磨の浦

舞子の濱にて

魁の春や舞子の濱傳ひ

明石にて

寄る浪や船や長閑な明石灣

堺明國寺にて

一と本の蘇鐵にくらし春の宵

官幣大社住吉神社にて

旅衣かさせば散るや松の花

天下茶屋にて

家造りの古び目出たし今朝の春

奈良橿原池に衣掛柳を見て

旅人に見られて青む柳かな

手向山

鶯の啼く木は何處ぞ手向山

春日神社にて

鹿に餌をやつて見上る櫻かな

口笛を吹けば來にけり奈良の鹿

奈良にて圖らずも武藏野と云へる

原の名あるに、何となく故郷の思  
ひ出てられて

武藏野の名に見渡すや春の草  
武藏野へ横たふ花のくもり哉

三笠山にて

町の上さくらの上や三笠山  
木も霞み草も霞むや三笠山

三月堂及二月堂の古き建築を見て

ゆかしやな又來る春の幾千度

氷山停車場は昔し奈良の九條通り  
なりしと云へど、今は此の附近田

畑多し

畑の麥田の麥青し氷山

東大寺にて

霞さへ匂ふや法の山かつら  
來て見ればかゝる鐘あり花の中

法隆寺

花かほりかほり七堂伽藍かな

月か瀬にて

此里に此梅ありて此家かな

京都に來りて東山にのぼる

春風や人に親しき東山

清水觀世音にて

人聲をたてこむ花のくもり哉

清水音羽の瀧

瀧つばや散り込む花の香に淀む

圓山公園

松高し低し其間の幾さくら

智恩院

松杉の中やひんやり春の風

祇園八坂神社境内

永き日の影置く松の梢かな

京都舊御所

榮え行く御代のためしや松の花

京都二條城

舞ふ鳶の小さく見ゆる霞かな

大極殿

美しくしき屋根のうるみや初霞  
とり分て静かな庭や薄霞

京都鳥原

夜櫻や手折らんとする人計り

南禪寺

笈洩る水音寒し柳蔭

鳥部山にておしゆん傳兵衛の墓を  
見る

浮世かな咲きもおとせず散るさくら

眞如堂にて

參詣の來る度啼くや雀の子

いかによい遊び所や雀の子

黒谷にて

音は皆松の雫や春の雨

石ぶみの文字讀み兼つ春の雨

金閣寺にて

此上は鶴も飼ひたし梅壺  
囀や衣笠山の松ばやし

銀閣寺

鶯や月待山の朝ぼらけ

京都妙法院境内秀吉公見返りの松

永き日やまた見に戻る庭の松

今出川通にて

小原女も我も踏みけり春の草

北野天神社頭にて

梅の花天つ日のさす匂ひかな

官幣大社平野神社



よく見れば皆別々のさくら哉

御室御所

長閑さや都ながらの鄙ところ

嵐山

春寒し花に間のある嵐山

男山八幡

松の花鳥居くゞれば匂ひけり

大坂よりの歸途伊勢參宮をなす

内宮社頭にて

嚴そかに春は立ちけり神路山

國の春立ち初めにけり宮柱

天長く地もいや久し神の春

外宮社頭

宮籬や國の春立つ旭の光

日の御影綾にかしこし今の春

神垣や神の恵みの今朝の春

二見ヶ浦

注連ちらりちらり静けし春の風

伊勢の海岸

霞む日やゆたゆた白き浪かしら

伊勢の高倉山に登り天の岩戸を仰

ぎて

國の春立ちけり國のはじめより

見ゆるもの皆神々し今朝の春

□ 三峰山參詣の折

(明治三十八年十二月)

三峰山頂に達せし時、日暮れて月

は社頭の老杉を照らす

心にも塵なし月の冴る庭

三明朝三峰を出て立ち坂路を下り

眺望亭に憩ふて

野の寒さ見下す山の寒さ哉

麓に近き清瀧亭に休み茶菓を喫し

土産物などを求む

朽菓子味の試みる小春かな

大達原堅道を過る時

岩角をすどく吹くや冬の風

影森村なる二十八番観音の洞穴に

入る岩は一面の石灰岩にて白し

霜枯や胎臍界もまた白き

荒川橋に来る深溪を覗けば目眩む

ばかりなり

橋長し高し殊更冬されて

大宮町にて道を急ぐ日は西に傾き

二子山上僅に夕陽を留む

冬の日や山の影さす山の上

歸途は山間の溪流に沿へる道を

成木村に向つて進む

谷々をめぐりて長き氷かな

□ 東北紀行

明治四十四年九月仙臺より松島に遊ぶ

利根川縁にて

逃水は逃げて光るや稻の露

日暮れても目に立つ稻の穂波かな

白河を過ぐる頃夜既に深し

稻妻やいづれか分かぬ關の跡

透し見る行方の廣し月の秋

限りなき田にかぎりなし稻の出來

仙臺青葉城を望み

搦手は鳥も通はず秋の風

秋清し幾代古りたる松の色

宮城野にて

皆町へ道のまとまる花野哉  
よく聞けばよく聞ゆるや虫の聲  
名の知れぬ草の中なり虫の聲  
草の戸の入口狭し萩の花

芭蕉辻にて舊き建物の屋根に蚊籠  
瓦を見て

秋の空龍も躍らんばかり哉

つゝじが岡にて釋迦堂の荒破せし  
跡をながめ

立ち並ぶ櫻も今や秋の色

彌蓋神社に詣づ古松老杉多くして  
雑木少なく神々し

秋の色遅きも神の御山哉

海岸にて松島行汽船を待つ、梨賣  
る女交る交る來つて買はんことを  
強ふ

梨賣の女子しつこし秋の雨

松島に至る此時雨晴れて一點の雲  
をだに認めず

松島へ来て凌ぎよき残暑かな  
松島に先づ知る松の雅かな  
松島や鳥渡其名も聞きされず  
松島に忘れて居たる扇かな  
松島の松に出る月入る日かな

松島驛より岩沼驛までの切符を求  
めて汽車に乗る

出来秋やこゝも田所稻所

十一日早朝岩沼驛より海岸線にて  
歸宅の途につく天氣晴朗にして心  
地よし

稻の香や五十四郡の朝心

阿武隈川を渡る時稻作の豊かなる  
と厄日を無事に過ぎけるを悦びて

秋の川しかも濁らず流れけり

勿來關を訪はんと思ひたれ共日時  
の許さゞりければ止みぬ、

關跡に少しく櫻樹あれ共往昔は櫻  
樹多かりしならん今も往々櫻花の  
化石を出す由

秋も香に立てよ名残の櫻石

勿來關附近秋草の花亂れ咲きけれ  
ば

雨に濡れ露にぬれけり女郎花  
關の趾装ふ山の錦かな

□ 東北視察記より

大正三年一月郡の囀を受け福島宮城兩縣の  
産業視察をなす

早晚上野を發す車中熟睡しける間

に郡山に着きて

白河の關も夢路や御代の春

福島を過る頃弦月高く照らせらる  
き耕田は昨年凶作の俵をとゞむ

苜殘る稻の淋しき冬田かな

歸途東那須野附近にて殺生石の跡  
なりと云ふをながめて

春立つや殺生石のほとりにも

鹿沼驛附近にて日光舊街道の杉の  
並木を見る

雪も根に青き杉並三里かな

大谷川にかゝり神橋を眺めて

積む雪やくつきり赤き橋の上

御廟に近き所老杉楡を交へて高し  
殿宇の壯麗美觀云ふ可らず

雪礫浴びぬ大樹の下蔭に

長へに此春立つや日の光り  
いかめしや三百年の春の色

□ 松島再遊の折

(大正三年十月)

雲か山か島かあらぬか秋の海  
餘所になき秋の日和や千松島  
松島の松は黝みて草紅葉  
若し人の問はゞ答へん秋の色  
松島の松黒々し秋の月

□ 西遊紀行の途上

(大正八年四月)

甲州路にて

解け残る雪猶深し駒ヶ岳

鶯の啼くや日の春日の表  
神代から匂ふ神代の櫻かな

岡谷にて

麗かや工場の煙り湖の舟

寢覺の床にて

花の酔寢覺の床に覺しけり

小野瀧を過ぎ

春も未だひゞきの寒し小野の瀧

逆落す雪解すさまじ小野の瀧

盤江を過ぎ彌富邊にかゝれば汽車

の右側は田續きにして菜の花蓮華

草今か盛りと咲く

菜の花や過ぎし尾張路行く伊勢路

松坂驛附近にて一枚の板を船に代

へて泥海を滑走する漁者の様を見

て

一枚の板を命や春の海  
長閑さや一枚板を船として

豊受大神宮にわかづき神徳を仰き  
奉る

明の春立つや御神の御前より  
奥深き宮路や神の花薫る  
御手植の松や幾代も此色を

伊勢大廟にて

我國に立つや日の春國の春  
神風の吹いて立ちけり國の春  
神寂し木々やおのづと風光る  
神風の添ひし若葉の光り哉

御裳澗川に口嗽きて

咲競ふ花に香のあり御裳澗川  
神の花口嗽くとき匂ひけり

二見か浦にて

春風の吹くや二見の浦つゞき  
賑はしき二見が浦や春の風

武藏野と呼ぶ所の奈良にありけれ  
ば一入床しく思はれて

武藏野の名に見る奈良の董かな

奈良にて

風光る奈良や大佛春日山

長谷にて

花の長谷蜃氣樓かと思ひけり  
麗な長谷や慈眼の人ばかり  
餘所になき牡丹咲きけり長谷の寺  
仰ぎ見る三頭山の霞かな

吉野にて館屋彌助の後裔なる彌助

の釣瓶館屋を見て

吉野路や花の土産の釣瓶館

吉野山にて

天つ日の明るし花の吉野山  
白雲の上なり花の吉野山  
袖袂濡すや花の下平  
吉野路や花に親しき人ばかり

和歌の浦にて

心澄む風や長閑な和歌の浦  
長へに囀る鳥や和歌の浦

堺にて明國寺の蘇鐵を見、それよ

り大濱の海邊に出て

春の日の春知る知淳の浦邊かな

大坂にて

難波津や舟の往來も春の風  
大坂の春や空迄たつ煙  
鶯の啼さけり知淳の浦の風  
麗かや天保山の朝ぼらけ  
乙鳥の高ふ飛びけり天王寺

宇野驛に着し讃岐に渡らんとして

畑の麥田の麥青き宇野路かな  
高松に上陸して

水草も船もゆるがず春の海

壇の浦に産する蟹を見て

行春を口惜氣なり平家蟹

讃岐金刀比羅宮にて

皆が見る櫻の馬場の櫻かな  
象頭山さらさら風の光りけり  
神の花神のいそしむ盛りかな  
琴平や山の奥まで風光る

嚴島神社にて

鹿の餌も賣れるや春の嚴島  
いそがしき宮居や春の嚴島

瀬戸海を航し日將に暮んとす

永き日も暮惜まれつ瀬戸の海

一の谷に來りて

鶯の聲もするどし一の谷  
敦盛の墓に淋しし春の雨

須磨にて

須磨寺に宿りて須磨の月見かな  
船の須磨霞の須磨や浦風て  
霞む船霞まぬ船や須磨の浦

京を去りて

京を出て見返る京も霞かな  
曇りても晴ても床し京の春  
京にては京の流行や花衣  
船に船人長閑なる琵琶湖かな

近江長岡にて北を望めば、煙雲鎖

して伊吹山を見る能はず

雲かくれ霞かくれや伊吹山

鈴川を過ぐる頃逢に田子の浦を見

て

長閑さや晴渡りたる田子の浦

四月十九日晴天無事歸宅す

皆無事に咲さけり庵の遅ざくら

□ 伊豆山温泉に保養の時

(大正拾二年)

伊豆山相模屋にて

夜や涼し千里海山濤の上

伊豆山神社に詣て

初鳥を脚下に涼し鳥居先

古々井の社にて輔元卿の詠歌も偲

ばれて

時鳥古々井の空に子戀鳴く  
親心子知らず啼けり時鳥

鳥賊取船の漁火沖を照らすを見て

漁火の夜な夜なゆかし夏の海  
百樂園に憩ひて

みる人の見返る庭の茂りかな

旅舎相模屋にて

誠ある心に涼し濱泊り

□名所吟

富士山

不二の山目につく塵もなかりけり  
雲はみな裾を這ひけり不二の山  
遠ければ遠くて床し不二の山  
聞しより見しより高し不二の山

松島

松島に見出せし蝶の白さかな  
波碎け碎けて涼し千松島

橋立

橋立や松光り合ふ小春風  
橋立や松のさへし秋の色

嚴島

嚴島朝から風のかほりけり  
白雨も錦になるや嚴島  
世の夏を餘所に涼しや嚴島

嵐山

世はなべて塵なり花の嵐山  
散る花もなき曙やあらし山  
花咲て人波たつや嵐山  
此奥も花なり花のあらし山

御室

時鳥なくや御室の月夜さし  
梅の宮  
拍手の音に晴れ行く霞かな

吉野

何處までも花なり花の吉野山

須磨の浦

須磨の浦月は昔の照りながら  
今日と云ふ今日も長閑や須磨の浦

江の島にて

寒いほど風の這入るや夏座敷  
月さして浪もあがるや夏座敷

鎌倉山

月の出る方から來たり時鳥

鶴岡八幡社頭

雲の峰くづれて松の高さ哉

稻村ヶ崎

春風や濡れては乾く岩の沙  
涼しさや波をおし行く風の音

武藏野

武藏野や通れ丸き月の出る  
武藏野の夜明好まし時鳥  
むさし野のその片隅や夕時雨  
高尾山  
昔のある樹も紅葉なり高尾山  
今日はまた今日の色ある紅葉かな  
中々に眼の草臥るもみぢかな  
花よりも赤き高尾の紅葉かな  
小金井  
歳古りし樹も立派なる櫻かな  
京の花見盡して此櫻かな  
上野  
松影へ退いてよく見る櫻かな  
込み合ふて誠の見えぬさくら哉

向島、隅田川

土手縁に枝の浮雲なき櫻かな  
言問ひに言問ひはづす櫻かな  
曙や花の色香の隅田川  
葩の外に塵なし隅田川

九段

四里四方八百八町八重霞  
登る日の真直にあたる櫻かな  
壯夫のいさほし惚ぶ櫻かな

不忍池

蓮の香やもう仲町の人通り  
咲ききつて夜の明け早し蓮の花  
蓮清し水の濁りにかゝはらず  
夜の明る榮りや蓮の開く音  
蓮の花見て居る内に開きけり

愛宕山

やゝしばし海もながめつ花の山

目の下は埃りの深し花の山  
よい町の上に涼し、愛宕山  
浅草  
飼猿の脊にちりかゝる櫻かな  
人をよけ人をよけ見る櫻かな

□御題

雪中竹(明治三十四年)

吳竹の力見えけり雪の中  
雪の竹動かぬ御代の姿かな  
君が代や雪にも竹の伸るやう

新年海(明治三十六年)

殊更に海静かなる初日かな

巖上松(明治三十七年)

巖に根を強き大松小松かな

新年川(明治三十九年)

新年や神代から汲む五十鈴川

新年松(明治四十年)

先づ松の色に目のつく今年哉

社頭松(明治四十一年)

誰が眼にも付くや此松此社  
松高し清し畏こき宮の庭

雪中松(明治四十二年)

人にしてほしき姿や雪の松  
雪の中松は雄々しき姿かな

新年雪(明治四十三年)

雪清しきよきを晴の今年かな  
新年の雪新年の光りかな  
雪積りつもり豊けき今年かな  
新年の雪に潤ふ田畑かな

寒月照梅花(明治四十四年)

寒月の照らすや庵の梅の花  
寒月に見出すや梅の咲く力

松上鶴(明治四十五年)

老松や千代に巢籠る鶴の聲  
松を立つ鶴の降りけり松の上  
折鶴や描きし松の其上に  
鶴すむや朝日先づさす松の上  
君が代を壽くさまや松の鶴

社頭杉(大正三年)

神垣や苔むす杉のいかめしき  
國柄やこゝにもかゝる杉社

寄國祝(大正五年)

萬代もゆるがぬ君が御國哉  
人は増し地は殖え國の力かな  
榮え行く國に咲きけり年の花

旭光照波(大正十一年)

殊に照る波や初日の登り際  
登る旭に照ります波や今朝の春  
四海波輝き初めぬ初日の出  
曉山雲(大正十二年)

□ 時事及其他

豊島海戦勝を制して日旗飄々と  
朝鮮海上を往來す

神風の一と吹きゆかし夏の海

牙山の堅壘を陥れしと聞き

涼しさや不意と抜けたる肩のこり

皇軍一度韓京に入り士氣大に振ふ

日の御旗輝く高麗の土用かな

清兵二萬餘平壤を固守す、我軍の

勇猛なる儘に一晝夜にして陥る

見掛より消へるに早し秋の雲

黄海の戦に清艦全滅す

嘗て世に聞かぬ手際の花火かな

九連城陥落

ひと夜さの風に皆散る木の葉かな

至る處旭旗飄々たる韓人の迷夢今

にして覺しなるべし

野も山も大和錦の紅葉かな

我軍連戦連勝す清軍何そなす事ありや

りや

四百餘州たゞ秋風のひゞきかな

大山大将の率ゆる第二軍花園口に

上陸せしと聞き

又ひとつ開き初めけり冬牡丹

第二軍金州城を抜き又大連灣の砲

臺を占領す

登る日の光り際立つ小春かな

旅順の堅壘も僅か一晝夜にして陥

落す

もう底の知れし深さや冬の河

怒る時は其武鬼神の如く和く時は

其仁支將を降伏せしむ、整々堂々

挽ます儘まさるは我征清の軍士な

り

其香り高し大和の梅の花

諸所の戦勝の報に接して

向々や唐木紅葉の其落葉

連戦連勝の明治二十七年を送りて

明治二十八年を迎ふ

月雪に勝る心地や今朝の春

征清兵士の勞を想ふ

火を焚て居ても夜更の寒さ哉

橋木城及び海城の時報に接し

いさましましき咄しを年の名残かな

臺灣また我軍の占領する所となる

長閑さやしきりに進む砲煙り

今ぞ知る國の光りの初日かな

北京城頭忽ち日旗の飄るを見ん

初日の出國の稜威の姿かな

我國の稜威はかくや初日の出

馬關條約の成りし時

嗚呼嬉しうれしや花の咲競ひ

三國干渉の結果遼東半島を還付す

るに至る

たゞならぬ夢に齒を噛む四月哉

凱旋式の當時

長閑さや數え盡せぬ日の御旗

凱旋の兵士を迎えて

野も凱歌山も凱歌や春の風

伯爵油小路隆定氏書を寄せられ最筆の短冊を所望せられし時

よく聞けば笛なり鹿と思ひしも

明治二十八年六月二日信濃南佐久郡野澤村武田雲老人の計に接して

夕立や俄かに濡らす袖袂

「文月や心ばかりの風が吹」とは長崎なる竹外主が文音の折祖翁の御像並に畫扇など送られける時の句にして其心事思ひやられければ

文月や噫なつかしき空の色

五日市分署長河村源八氏と風雅の交り深かりけるが東京へ轉せられし旨申越されければ

鶯や又近くして聞かまほし

長崎なる月涼園窓曉子次男を揚げられ其祝章を望まれし時

乙咲もやはり立派な牡丹かな

明治二十四年十月末の八日俄に大地震ふ、翌日岐阜愛知兩縣の慘狀を記せる新聞の報に接し

話し聞く度にいや増す寒さ哉

明治二十九年六月十五日宮城岩手兩縣に跨れる大海嘯の慘狀を聞き

晴るゝ日のなきも道理ぞ入梅の空

明治三十年一月十一日皇太后陛下瀆焉御登遊ばさるゝ海内萬民の哀傷如何ばかりなるや

いつ迄も忘れぬ今日の寒さかな雪折や千代を願ひし松ながら

祖翁の眞蹟を得て

仰ぎ見る色や匂ひや道の花ありありと尊とさ見えつ枯尾花

松原庵琴通ぬしが立机披露に招かれし時

取分て今日着心の裕かな

明治二十六年十一月十九日冬木町に芭蕉神社落成し遷宮式執行の旨知らせこされしも要事のありて臨席能はざりし時

時雨には逢はで心の時雨かな

殆と一萬七千の人命を斃せし赤痢病未だ全く撲滅の期に至らず

人々の心ろいためる野分かな

山地中を將悼む

曇りしもことわりや嗚呼後の月

徴兵検査に臨みて

みな早くよい實を結べ竹の花

「古木とは見えぬ色香や梅の花」とは、伊勢國多氣郡藤原なる中井社樂が余の四十三歳なるをも知らず古稀を賀するとして送られし句にて、且つ氏の父蘆雪ぬしは古稀なる由にて拙句を所望せられければ

梅の花世にかぎりなき匂ひかな

河越逸記氏は無二の學友なりしも業卒へて後行方の知れざる事十八年、初夢に不圖再會せしと見て夢さめて後其佛眼前にあり

初夢や日頃慕ひし友の影

陸月七日東京醫會の發起にて征清の役に従軍せられし陸海軍々醫の



慰勞會を江東中村樓に開く、偶々河越逸記氏に會す驚きまたは悦びて初夢の事など語る

七種や兼て親しき芹なづ菜

某日河越逸記氏を訪ふに數十本の扇面を示さる、何れも當代畫家の傑作になる不二山なり、其意百不二扇面帖を仕立てんとなり、己も家に歸りて後不二山を畫き送りける時はからずも浮び出てたる句

畫にしても不盡は目出度委かな愛鷹も雲もふもとや富士の山

明治三十三年伊豆三島なる孤山堂凌頂のし還曆の賀集を催されけるに

世に長き香り氣高し松の花

明治三十四年の春駿河臺下裏猿樂町に假住し、偶々植木屋より芍薬の一株を得て園中に植ゆ

芍薬やばしらく狭き庭に咲け

二月以來日毎に賣家を見付くるも兎角心にかなひしものなし

住のよき家のほしけれ夏の月

明治三十四年の夏は十五六年來の暑さにて、夜は納涼の人夥しきを見て

橋々の賑はふ夜の暑さかな

兩國川開の時

京の空見上げみあげる花火哉

當年の暑さに果物を買ふ事多し

子供等にねだられて買ふ西瓜かな

草一つなき町家の庭にも虫しきり

に鳴けり

よく聞けば皆別々や虫の聲

社會の耳目を變動させたる伊庭想太郎の未決監内に病めるを診て

伊庭の夢聞きたゞしたる夜長かな稻妻や鳥羽田をめぐる鳥羽の人

土地馴れざる母が遊歩に出てしを待ちて

鯛釣て見に出る母の戻りかな

明治三十六年三月高井對雲三度北國漫遊の途に上る時

行先も花なり咲かん筆の花

母八王子の十夜會式に参りける時に

年寄の年より誘ふ十夜かな

八王子西川商報發刊を祝て

國の幸起す光りや初日の出

明治四十年一月長崎市なる月涼園望曉詞宗今年初老の祝祝句を集むとて所望せられし時

世の人に知られて咲くや年の花

同人父古澗涼泉氏今年古稀なりと

て祝句を乞はれければ

寒梅や流石に強き咲く力

八王子新日本新聞の發刊を祝ひて

涼風を起す言葉の泉かな

よい聲を四方に傳ふや時鳥

今年八月に入り雨頻りに降り關東

は六十年來の大洪水とか

家のなき人のいぶせき残暑かな

山を抜く風も添えけり秋の雨

井上侯の病狀日々に重ると聞き

今日も又うたてき秋の日和かな

前文部大臣菊池大麓男京都帝國大學總長に任ぜられし時

菊の花小さな庭に咲きにけり

明治四十五年開催すべき大博覧會は、内閣更迭と共に明治五十年に延期せらる

出し抜けに延して揚る花火かな

東京市勢調査は一時市人の恐慌を來す

秋の風都大路をおそひけり

假名遣案は遂に廢止の運命に會す

又もとの場所に戻りて月見かな

馬券廢止を聞き

秋の雨心いためる人もがな

巖に井上侯を襲ひ、近く野津元帥

を侵せし晩秋の風は、茲に三度維新の元勳たる榎本子を襲ふに至る

どうしても物憂き秋の夕かな

秋の聲重ねて胸に響きけり

米國太平洋艦隊歡迎會は東京に開かれたり、米人の喜び其極に達せしものゝ如し

陸み合ふ客や主や菊の宴

米艦歡迎當時の彼我の親睦をして願くば永久不變のものたらしめよ

これぞこれよきためしなり豊の秋

新刑法の實施は我等の喜ぶ所

いざ共によき道行かん花野原

印度に大洪水ありて其慘狀筆紙に盡し難しと

聞もうし海のあなたの初しぐれ

萬代をこめて立ちけり國の春

米國一二の新聞漸く排日の不可を論ずるに至りしとか

真心になつて見優る櫻かな

織物販廢止同盟會の設立を聞き

よくも氣を揃へて強し春の人

又新會を中心に新政黨を組織せんとす

とく咲いて誠を匂へ山櫻

衆議院議事日程を見て

よく聞けは聲に隙ある蛙かな

高等商業學校學生千五百名退學を決議せし時

油断なき聲のひゞさや時鳥

同學生退校後代議士其他商業團等の仲裁にて復校せし當時

米國加州に排日黨ありて排日運動をなすと聞き

見ぬ人の怨み羨む櫻かな

日の春を知らぬ風あり海の外

伊太利の震災は被害劇甚諸國競ふて義捐金を送る

待たぬ月待たぬ日春の寒さかな

米國の排日案は議會の否決する所となりしと聞き

登る日にとける加州の氷かな

商業界目下の不景氣は必ず近く挽回せられん

降る雨は降つてのあとや咲く櫻

英獨兩帝の會見せられし當時

人の眼を惹きけり花の主とぬし

憲法發布二十年祭にあたりて

啼き戻る聲のしほらし不如歸

同學生に鑑み教育當路者に望む

眞直に先づ啼いて行け杜鵑

日糖會社不正事件

予子や浮くも沈むも心柄

同會社不正事件頗る廣し

何時迄も續く山路や木下闇

函館の鹽戻税疑獄を開きて

上下の眞共にくらし五月雨

國枝館の新築を見て

涼風の途切れぬ玻璃の館かな

同館の初興行

かくなりて殊に立派や夏角力

近江栗津の義仲寺なる祖翁の廟荒

れたれば、是が保存のため時雨集

なるものを發刊し其利益金を以て

保存基金とせらると、我も亦これ

を賛して

皆人の慕ふ粟津の時雨かな

湖に其音廣き時雨かな

居直りて音聞直す時雨かな

八王子なる寒香園梅起ぬしの年回

句集選句の軸を送る

梅さくや咲くやなき友懐かしき

蓮清し水の濁りにかゝはらず

八王子松原庵嗣號披露句集祝句題

雪

雪三日流石に松の力らかな

五日市町山市亭か翁塚再興に手向

目を閉ていざ雪見せん翁塚

五日市萩原萩峰、内山外川兩氏追

福手向

心ある曇りや花の山つゞき

大正四年御即位の大典を擧げさせ

られ給ふを祝し

力づく蒼生や豊の秋

八束穂のみのりも君が稜威かな

表慶館に陛下御即位の御物を拜觀

して

菊の香やあたり眩き高御坐

御大典奉祝

菊の香の満ち敷く國の内外哉

勵志守常

怠たらぬ人が取り勝つ田草かな

默而得時者即保身

待てさへ居れば涼風通ひけり

要言不煩

鐘ひとつふたつを去年と今年哉

徳不孤必有隣

よい風のこゝにもありて夏の月

彼此相濟

助け合ふて見事抄取る田植哉

忠實服業

暑しとも云はで働く男かな

勤儉治産

身をせめし甲斐の見えたる蟹かな

醇厚成俗

里人の心美しくし麥の秋

自彊不息

短か夜や仕事仕舞へば鶏がなく

國のため身のため勵む田植哉

漢詩

客中早秋

清涼入早秋 朝露濕菽稠  
蟬蟋啼階下 誰知惹客愁

雪夜煮茶

茅廬試茶味 深夜睡無催  
天外看何處 連鴻掠月來

寒風穿戶隙 夜半雪皚々  
爐上燒檜柶 清茶當酒杯

寒夜宿漁家

日暮遙求宿 孤舟載酒過

漁家寒夜興 奈此月明何

山行

山々紅葉夕陽催 賓雁映雲送月來  
行逕停筇歸去晚 遊詩拾得有新裁

題菊

滿園秋菊傲霜開 白々黃々闔奇來  
聊慕風流靖節宅 南山相對意悠悠

漁村歸夜

江村涼夜月光明 撲岸金波影自清  
漁父停舟蘆荻裡 遙聞前浦白鷗鳴

晚秋

晚來人少轉淒涼  
鳴鴈高飛草木黃  
茅舍蕭々秋色暮  
砧聲何處淚沾裳

冬日田舍

村々禾熟皆收藏  
笑語農人會草堂  
濁酒酌來坐爐上  
酣歌相對醉遊長

雪夜煮茶

北風吹雪滿郊衢  
寒夜擁爐寂四隅  
童子煮茶供好友  
笑談無限得清娛

雪夜詩會

茅齋憑牖不知寒  
飛雪敲窓夜欲闌  
閑臨孤硯呵凍筆  
新詩漸就漏猶殘

雪中山居

千山皎潔白西東  
飛雪稍晴夕日紅  
獨坐憑爐燒落葉  
時傾酒杯話隣翁

雪中探梅

溪邊何處暗香來  
尋得梅花興自催  
飛雪紛紛多好景  
寒村却是意幽哉

登愛宕山

愛宕山上望悠然  
蒼海遙征房總船  
頃刻晚潮生皓月  
惹將此景落吟邊

金龍山

金龍山上梵音頻  
賽得朝々幾萬人  
旭日娟々耀玉殿  
塔頭夫影更無塵

雪中訪友人

千山如玉雪漫々  
老樹帶風聲更寒  
不是扁舟尋戴興  
敲門偶爾問平安

述懷

古今成敗幾英雄  
徒爾自憐白髮翁  
半夜書窓眠未就  
多年零落感無窮

觀楓

山楓猩血映斜陽  
一路尋秋到草堂  
更有吟朋知我意  
塵烟逃得俗慮忘

除夜

算清殘積坐燈前  
屈指明朝又一年  
稍識瓶梅春意動  
交栽松竹瑞祥傳

二四八

歲旦

朝曦新上海東天  
松竹映窓壽席鮮  
拜喫屠蘇正元酒  
千門萬戶簇春烟

歲旦

彩霞初上海東天  
風靜清晨旭日鮮  
四海昇平歡不極  
壽觴先祝大翁前

二四九

春曉

旭日曠々萬里春 門迎瑞氣曉鷄新  
高堂老幼傾椒酒 偏喜昇平賽歲神

上高尾山

飯網山上紅森林 慰意幽禽傳好音  
突兀奇峰仙苑境 琵琶瀑布滌塵襟

春日喜雪

山風吹雪繞山川 松竹如花樹々鮮  
聞得隣翁談吉兆 三春尙是瑞豐年

春日郊行

逍遙閑步弄新晴 吟杖芒鞋渡水行  
狂蝶尋花似追客 谿林猶聽衆禽鳴

月沈西嶺欲天明 風暖溪邊百囀鶯  
詩客小樓眠未覺 夢魂猶是繞花行

花下與友人飲

花陰遊宴一忘歸 終日閑談對夕暉  
更似飲中八仙興 如斯逸事近來稀

客舍聞鶉

杜鵑啼血夜三更 獨對月前堪憶鄉  
續々雲端聲不已 枕邊惱殺遠人情

池亭看蛙

池上幽亭夜色催 玲瓏月影照蒼苔  
憑欄時見波紋湧 幾個群蛙成隊來

池亭賞螢

晚來開戶枕池塘 陣々微風水草香  
明滅群螢飛散去 兒童爭逐幾星光

驟雨

濛雲捲雨過江來 電影高低走怒雷  
傾盆黃昏堪滌暑 一天翻墨繞崔嵬

喜白雨

濕雲聚散幾西東 驟雨陰々奏地功  
村落新秧又堪插 果然知是占秋豐

訪隱者不逢

逍遙閑步碧溪頭 一脈涓々澗水流  
松下逢童相問去 白雲深處認僊樓

中秋望月

雨晴雲散晚來清 馥郁桂花香自生  
皎潔東山初吐月 一天無靄夜分明

尋某先生

先生茅屋綠川邊 猶見床頭翰墨傳  
詩料如山書萬卷 三餘不倦賦新篇

圍碁

圍碁恰似陣中情 烏鷺相競用散兵  
不覺敲盤猶未寢 半窓殘月欲天明

客舍聞砧

月沈西嶺夜深々 客舍蕭條尙聽砧  
萬里江山秋欲晚 寒衣未寄淚沾襟

郊行聞笛

斜陽午背遠飛聲  
亮々隨風音自清  
停杖郊頭猶耐賞  
收將此興適吟清

午 睡

茅軒盈尺午陰濃  
松竹風清氣似冬  
閑臥北窓輔枕席  
高眠猶到夕陽春

苦 熱

炎風如煮到斜陽  
裸體流汗尙欲狂  
況復農人三伏日  
耕耘勞力不尋常

晚冬述懷

爐邊閑坐夜窓虛  
空感世情思有餘  
靜煮瓶茶勸句讀  
柴門深鎖樂山居

偶 成

修身願已又隣人  
謙讓扶朋德作隣  
富貴高名元不羨  
能明得失守天真

寄 學 生

少年應勉事專攻  
他日何知有大功  
古哲前賢無別法  
請看修業出英雄

哭學友吉岡直吉病死

螢雪窓中水石盟  
豈圖僵化送哀聲  
人間萬事塞翁夢  
靈魄難招奈此情

上野公園

公園結構百工新  
此地兵塵歲戊辰  
今日靜清仙境景  
佳樓麗館惹遊人

客舍聞雁

寂々旅窓難就眠  
故園何處水雲連  
愁聞鳴雁秋雨夜  
偏使征人淚泫然

奉 拜 臨 幸

君王臨幸下令明  
萬戶拂塵揚國旌  
此日天晴雲霧靜  
四街偏聽昇平聲

初 冬 夜 坐

凜冽寒威夜透肌  
北風吹樹月光移  
旅窓欹枕孤燈下  
獨坐難眠空賦詩

雪 中 遊 山 寺

遠聽梵聲尋寺來  
雪光如玉映樓臺  
平生蘆外況今日  
煎茗與僧談善哉

雪 中 訪 友 人

雲繞萬山風雪寒  
訪君遙到路漫漫  
饑鴉飛去人烟絕  
村舍模糊欲見難

雲 江 晚 釣

日夕寒江風雪晴  
歸鴉飛散四無聲  
短蓑垂釣輕舟裏  
蘆岸模糊照眼明

苦 寒

北風飄雪滿林丘  
密々高推晚未休  
凜冽寒威時閉戶  
友人相對去相留

詠 竹

脩竹緜々亦可秋  
綠雲千畝影悠悠  
王家雅趣今何處  
恍見清風起葉頭

歌 松

百尺喬松綠鬱然 歲寒堅節萬年傳  
殊榮況復存人口 秦帝授官急雨天

柘 櫚

榴子團々恰似瓊 枝間秋熟露華清  
追思造化無私賜 能使天靈遂發生

黃海戰勝

大艦衝波進退輕 茫茫蒼海煤煙生  
我軍精銳頻連戰 巨砲轟天沈敵兵

題 漁 夫

畫靜江村脫世塵 柳陰深處儘垂綸  
一竿日月閑生計 汝亦桃花源裏人

題 藤 上 松

喬松蒼鬱帶祥烟 岩上凌霜綠接天  
好是節堅如國礎 龍吟不絕數千年

自 畫 題 蘭

愛見芳蘭抽數芽 清姿含露翠陰遮  
不須俗士來相顧 幽谷獨香君子花

題 農 夫

東園西疇無廢荒 輕裝閑意事耕桑  
耕桑本是收容夥 佳粒年々積在倉

遊 高 尾 三 光 莊

探秋一路到山莊 如錦丹楓映夕陽  
更有吟朋知我意 綺席開來侑羽觴

題 不 二 山

八朵玲瓏復玉顏 清觀變幻聳雲間  
千秋不改幾層立 當是東洋第一山

曉風拂袂露華濃 山鶴海波千萬里  
昨夜淺間臺上雨 碧空洗出白芙蓉



### 遠族より

父の文禮は安政四年五月武藏國西多摩郡伊奈に生れました。私の家は代々醫を業として居ますので、父も明治初年に東京に出て醫學を修め、學成つて一旦郷里へ歸りましたが、明治三十二年に大坂府へ職を奉じて、以後警視廳に轉じ、職を辭して再び郷里へ戻つて、醫療の傍ら郡村の當務に携はり、時に地方自治視察の爲め中國、北陸、東北などへ旅行を致しましたが、多くは家に在つて業務の傍ら、俳諧を楽しんで居ました。

俳諧は父の尤も深く嗜むだ楽しみでありましたが、その外漢詩と繪もかなり長く試みて居り、野口寧齋、福井學圃、荒浪煙崖、山田寒山、倉田松濤の諸氏等と交りがありました。

大正十二年の冬病歿致しましたので、素若、秋北の二人の弟等と緒にその遺稿の整理に着手しました。  
本書の成るに際して、順序もなく書き記したものを竹窓庵、曉賀宗匠並に天野雨山氏が、その校訂の爲めに御多忙の時間を割いて、適當に御編纂下つた御努力は、御禮の申しやうも御座いませぬ。又雪中庵、東枝宗匠並に太田水穂先生が本書の爲めに序文を下された事は、貧しい本書に幾段の光彩を添へますので、茲に衷心からの感謝を致します。  
斯くして成りました本書は、恰も迎へます三回忌に際して、亡父の靈前へ捧げる事が出来ました。地下の父も喜ぶ事とせう。

大正十四年十一月

坂本富雄

### 校訂を畢りて

武藏野の南都を東へ流れてゐる多摩川の本流へ、南多摩郡の高月の傍りで合流する秋川に沿ふて西へ向つて行くと、小高いなだらかな丘陵に北と南を限られた豊穠な秋留野が展開してゐる。打ち續く桑圃の處々から、時折石簇や石斧のかなり完全なものが發見されるのや、一見してそれと知れる舊い土壌の残つてゐる事に據つて、太古の民がこの地方の豊かな土の恵みを享けて居たことが判る。

その秋留野の南の末を流れてゐる秋川の兩岸は、上流へ溯るに従ひ、次第に高く盛り上つて溪谷を作り、露はな巖の肌の樹間を透いて見える観音山が、流れの南岸にけはしく聳える頃、北の方の野末を走つてゐた低い丘も、次第に高く

迫つて稍や急峻な山相を現はしてくる。

平坦な桑園の間を貫いてゐる五日市街道をこの邊りまで來ると、鷓犬の聲の近づくと共に路は眞直ぐに伊奈の郷へ這入る。路の兩側に五六十年も経たらふと想はれる見上げるやうに高い梨の大並樹は、先づ旅人の眼を驚かせる。若しそれが四月末の月の明るい夜でもあれば、人の往き來も静い路の左右の空を限る梨の梢には、透間もなく花が咲き満ちて、静かに仰いで行く人の袖に、僅かに蒼味を帯びた葩が、夢よりも淡くはら／＼と散りかゝる。又、山の端にほつかりと浮むだ雲が、動かふともせぬ十月頃の秋晴れの日であれば、見上げる梢のどの枝も、折れるばかりに圓らかな實が成り満ちて、兄らしい兒が梢から落して呉れる果實を、籠に拾ひ入れる幼い童に犬が戯れてゐる。機織る音

も静かである。

應春堂文禮居士はこの静寂な村でその一生を了つた。

梨の花咲く頃に生れ、逝つたのは採り残された梨の實が梢に霜寂びる頃で、近郷の同好者を率ゐて、結むだ俳團の名も『梨の花會』と稱へられて、今も猶ほ續けられてゐる。殊更ら宗匠顔して名を賣る如きは、その尤も嫌つた一つで、風調は飽迄純撲であり、日常の起居は極めて質實であつたのも、洵に梨の花の清純に適はしいものがある。

遺族の人達が、その夥しい遺稿の整理に着手してから約一年半を経て、かなり嵩高な原稿が私に渡された。前後三十年間に亘つて啄まれた句数は、約一萬二千餘りもあるの、その全部を採録する事は、あまりに大部になると、多い作品のうちには殆ど同一の境地のものもあり、且つは遺族

の人達の希望もあるので、父の曉賀に荒撰りをして貰つて、約九千句を得た。それを更に私が一千句を除いて季題の配例や分類をして、漸く印刷所へ廻はしたのである。校正の際に多少の加除をしたが、後から又換へ度いものがあったり、殊に遺憾に堪へぬのは、當然載せなければならぬ俳諧（連句）が、発見されなかつたので遂に加へる事の出来なかつた事である。父の外にも兩吟などを試みた俳人も現存してゐるので、種々探して貰つたが遂に間に合なかつた。廣い屋敷であるから其のうちに発見される事と想ふ。附編として巻末に組み入れた句と漢詩とは、その代りに添へたもので、故人を偲ぶ一端ともならふと思つて加へたのである。

大正十四年十月二十日

天野 雨山

大正十五年 一月二十日 印刷  
大正十五年 一月廿五日 發行

定價 金壹圓五十錢

俳諧の梨の花



編者 天野 雨山  
東京市京橋區南堀町二丁目六番地  
發行者 坂本 富雄  
東京府四多摩郡増戸村伊奈  
印刷者 荒井 東之助  
東京市小石川區戸崎町七十番地

發行所

東京市小石川區戸崎町七二番地  
電話小石川六四六八番  
振替東京四六〇八八番

蕉風雪月花吟社

551  
53

終

